

この愛すべき技術翻訳者たち ～この愛すべき技術翻訳者たち～

0201B

水上 龍郎

わたしの場合、技術関係の翻訳に首を突っ込んでから、30有余年たつ、そのうち、最初のほぼ10年は、翻訳70%編集30%の宮仕えであった。

いわば、徒弟時代である。次の23年間は、曲がりなりにも<翻訳する翻訳会社>と銘打って組織を経営してきた。その23期目のエンドがこの2月28日、24期目のスタートが3月1日である。

この間、多数の翻訳者が私の前を通り過ぎて行った。いっしょに付き合った時間の長さは年単位、月単位で数えられるのが普通であるが、中には数日、数時間というものもある。単なる接触をも含めるとすれば、面接だけで終わった場合が分単位、履歴書の段階で別れを告げた場合が秒単位ということになる。そして、この最後の二つがどうしても一番多い。

以上は<プロ・トランスレータ>または<セミプロ・トランスレータ>との出会い経験であるが、翻訳学校（年単位）とかセミナー（時間ないし日単位）を通してわたしが10年間におよび指導した<翻訳者の卵>と言われる人たちは、すでに何千人と数えることができる。

わたしひとりでの統計はこんなものであるが、この数字はほんの一握りでしかない。日本全国、卵クラスは別にして、プロ、セミプロレベルの技術翻訳者は、いったいどのくらいいるのだろうか。一説には、数万人とも言えるそうだ。

さて、わたし自らを含めて技術関連の翻訳者たち（この呼称は、ここでは、あくまでも本格的な技術翻訳の研究者や著作者を除く（実戦闘員）という意味に限定したい）は、一般世間で単行本の形で署名入り作品を発表する<翻訳家>と言われる人たちとは異なり、大物小物の区別あるいは有名無名の識別はない。このことは、技術の翻訳自体が、そのプロセスも結果も血湧き肉躍るような性質を持っておらず、きわめて地味な作業であるから当然であるといえる。また、だれでもあるレベルまで達しさえすれば、自称技術翻訳者として均等に仕事にありつくチャンスに恵まれるために、自動的に無差別化してしまうという事実がある。さらには、一種の専門職でありながら、扱う種類があまりにも多岐にわたりすぎてチェックポイントをどこに設けるか、だれがどのように評価するか、見当のつけようもないことがらであろう。翻訳製品そのものも、そのほとんどが陰から影へ流れてしまうという非公開性も重要な原因の一つかもしれない。

ただし、技術翻訳者の間だけで暗黙裡に差をつけている尺度がひとつある。それは経験の長さという、かなり便宜的な尺度である。これによって、古参・中参・新参の区別が生まれる。しかし、実際にはインパクトの弱さは疑うべくもなく、長い人は長いなりに、短い人は短いなりにといった程度で、それ以上のアイデンティティは何一つ与えてくれない。

つい2, 3年前のこの世界に飛び込んできた新参の訳者は言うに及ばず、経験年数と実際に訳した点数からだけ見れば、かなりの子さんに見立てられる人も、ともに位階薫陶とは全く無関係にして無関心をよそおい、著作権と価値的所有権の問題は一度や二度は考えてはみても、結局は遠雷の通りいくに似てとばかりに、ただひたすら無心に仕事をしていく。そして、品質評価、金銭換算、その他もろもろの取り扱いにおいて、戦闘員はみな平等、人を呪わば穴二つ式の精神に徹していくのが、この職業の全般的な風潮になっているのであろうか。

ところで、このような技術翻訳も、仕事へのかかわり方から分類してみると、切り口によってはなかなか面白い差別データが出る。特にフリーランス (free lance, またときに free lancer) と言われている人たちに、差別の徴候がはっきり出る。この面白さはもちろん、彼らが持つ固有の人間性に起因するものであろう。しかし、第三者から見ての面白さをもう少し深く観察すると、かれらが個人と組織の境界面において自分を最も効果的に生かそうとするとき、そこに技術者気質 (かたぎ) といわれるものが強く作用する結果ではないか、と思われるふしがある。

12年ほど前、私のところへ一人のフリーランス A 君がやってきた。会社に雇ってもらいたいというのである。一見豪傑風ではあるが、顔貌すぐれて頭の切れそうな好青年だ。試験の結果、採用と決まり、即刻仕事に入ったのであるが、日を経るにつれ、かれの紹介で5~6名の同先輩連が次々と

訊ねてくるようになった。みんな同じ某大学の外国語学部を出ているが、なんとなく定職から見放された、一癖も二癖もある人たちである、が、たしかに語学力はある。わたしは、多少の危険を感じたが、全員入社させた。まもなく、社内にこの塊が主流になって、小粒ながらもかったのである。<梁山伯>的な熱気がみなぎるようになった。

ここまではまあまあだったが、事情は徐々に変わってくる。この連中は個人としての翻訳技術はあっても、社会の秩序を守るという技術はなかったのである。そして、やがて破局がやってくる。ひとり去り、ふたり去りして、ついには全員消えてしまった。野心家たちの夢は、わたしの周辺では実現しなかったのである。

これは、フリーランスとしての翻訳者が閉回路内で野心を燃やして作業しようとしても、そうそう簡単はいかないことを示唆した好例であったかと、わたしは思っている。しかも、たとえ彼らが翻訳以外の面で親しく交際し、心を許しあっていたとしても、組織の中で翻訳技術を善用するという場面になると訓練ができておらず、というよりは、今までの交友では顕在しなかった自己の弱点がところかまわず暴露されてきて、最終的には<集まる>ことによる知的物的両面の生産活動から逃げた形で、消極的な<個>に戻るのである。ただ、わたしにとって<そは梁山伯>にあらず、渡り中間 (ちゅうげん) の巢であった) とはちょっとびり残念ではあったが。

フリーランスの B 君と C 君は、数年前に

ほぼ時を同じうしてわたしの会社に応募してきた。B君はおとなしいが、芯のある20代である。「先生の翻訳感が気に入った。先生の教えを受けながら先生と会社のために働かせてください」というのである。一方、C君は勝気そうな目つきをした壮年で「先生のことはよく知らない、しかし仕事をやりたい。納得できる報酬をくれるなら専属してみたい、ただ、あくまでもフリーランスとしてです」ということである。

秀吉と家康の時代に大活躍した技術屋に、忍者がいる。忍者は侍のようなものであるけれども、一般の侍とは違って、技術を持っていた。いわゆる（手に職を持つ）人たちが、生きて行くための手段としては二通りあったようで、ある者たちは主持ち、すなわち完全に家来となる手段を選び、他の者たちは風来坊、すなわちもらう金の高によって今日明日の運命を定めるといったものだ。前者は甲賀流忍者、後者は伊賀流忍者と一応色分けされている。この伝でいくと、さしずめB君は甲賀流者、C君は伊賀者ということになる。

それはさておき、C君の場合、いったんフリーで出発したが、その後B君と交遊を続けているうちにB君の人格と説得に降参したのか、最後には正社員になってしまった。そして、このふたりの会社に対する忠節ぶりはつい最近まで目覚ましいものがあったが、C君が退社していまではB君のみとなっている。

このあたりは、真田十勇士の猿飛佐助（甲賀）と霧隠才蔵（伊賀）に比べられるところではあるが、結末がどうも面白くない。

才蔵は最後まで残るのに、C君は節を絶っている。しかし、よく考えてみると、現実とはそういうもので、理由は明々白々、主従の主の問題があつて、この社長（つまり、わたしのことだが）は真田幸村のように魅力ある大物ではなかったのである。

何はともあれ、愛すべきは(Free-lance technical translators)である。梁山伯の豪傑、賭場の渡り中間、伊賀甲賀の忍者 ーいずれも、おのれの技術には、自信と誇りを持っている。

「工業英語ジャーナル」1998年より転載